

＜医学部学生に対する在宅医療教育の研究 完了報告書＞

オレンジホームケアクリニック

西出 真悟

○ 目的

在宅医療の推進が叫ばれているにもかかわらず、医学部では在宅医療に関する教育はほとんどされておらず、学生の間には在宅医療や地域医療に触れる機会はほとんどない。しかし、これまで学生や研修医を受け入れてきた経験上、在宅医療の現場に直に触れることや、知識を深めることで、在宅医療に関心を持つ学生や在宅医療への道を志す研修医を数多く見てきた。学生や研修医といった早い段階から、在宅医療の経験を積むことが、在宅専門医を増加させる一手であり、ひいては、在宅医療推進にも役立つと考えられる。

そこで、医学部学生や研修医に対して在宅医療の教育を行い、どのように変化したのかを調査することとした。

○ 方法

1, 定期的な勉強会の開催

医学部の学生や研修医に対して、定期的に勉強会や講演会を開催し、在宅医療に対する知識や技術の教育を行う。

2, ICT の利用

勉強会や合宿に参加した学生に対して、ICT の利用による情報共有やネット上でのレクチャーなどを行い、常時教育を受けられるシステムを構築する。

3, 長期休暇中に在宅医療現場実習

長期休暇中に在宅医療現場実習合宿と称し、実際の在宅医療での現場実習を行い、在宅医療の現場に直に触れる機会を作る。

4, アンケートによる調査

勉強会や講演会、合宿の前後にアンケートを行い、在宅医療教育によって、どのような意識の変化が見られたのか、どの場面で興味を引かれたのかを調査する。

## ○ 取り組み

### 1. 定期的な勉強会の開催

#### a. 診療体験&地域医療レクチャー

平成23年11月から医学部の学生を対象に、在宅医療の勉強会を定期的に開催した。訪問診療の同行と在宅医療のレクチャーを行うことで、在宅医療の基礎知識を得られると同時に、現場での実習を行える勉強会とした。レクチャーだけでは十分に理解することができない部分を、現場実習を加えることで、より深くまで理解できるように努めた。約20名の学生が1日2-3名ずつに分かれ、数日かけて診察同行とレクチャーに参加できるように設定した。その際アンケート調査を行い、訪問同行とレクチャーにてどのような変化が見られるのかについても調査を行った。地域医療について興味を持っている学生であっても、実際に在宅医療の診察を目にするのは初めてであり、診察の中から様々なことを感じ取っていた。また、診察同行後にレクチャーを行うことで、診察時の疑問や質問などをフォローUPできるような形式にした。参加したほとんどの学生が、実際の在宅医療を体験することで、興味を持ち、関心を寄せるようになっていた。学生の中には、2度、3度と診察同行を希望する者もあり、診察に同行し在宅医療の実際を知ることが、関心を高める一つの要因であることが示唆された。

#### b. 在宅医療講演会「在宅医療の魅力とは？」

平成23年12月3日(土) 10:00~12:00に、あおぞら診療所上本郷 院長 川越 正平先生を招き、「在宅医療の魅力とは？」というテーマで講演会を開催した。13名の医学部学生、初期研修医、医療関係者が参加した。

在宅医療業界のトップランナーである川越先生から、在宅医療に関する基礎的な知識や考え方、魅力についてのレクチャーによって、在宅医療の関心が高まり、活発な意見交換などが行われた。

#### c. 福井大学医学部地域医療学「在宅医療入門」講義

平成24年2月10日(金) 福井大学医学部2年生の地域医療学にて、「在宅医療入門」の講義を行った。

地域医療や在宅医療に興味のある学生だけでなく、学年一堂に会しての授業であるため、レクチャーだけでなく、理念や考え方なども自分で考え、感じ取れるような授業形式とした。昨年からは始まった試みであるが、この授業を通して、在宅医療に興味・関心を持つ生徒もいた。講義終了後に何名もの学生が直接話をする姿や名刺をもらいに来る姿がみられた。また、その中から何人かは、実際の見学や診察同行につながっている。

#### d. 医学部1年生を対象にした地域医療レクチャー

平成24年5月に3回にわたり地域医療学の授業にて在宅医療を調べる課題を与えられているグループに対して、地域医療レクチャーを行った。

ある事例を通して、地域医療について考えていく課題であったため、地域医療に対するレクチ

ャーだけでなく、課題で疑問に上がったことや地域医療の実際について質問に答える形式で行った。事例を通すことで、より深く細かなところまで地域医療の実際に踏み込んで考えることができており、質問や疑問に答えることで、地域医療について深く考えることができていた。

これまでは、地域医療に興味・関心を持つ学生と接することが多かったが、地域医療に関心が薄い学生であっても、授業を通して地域医療を考えるきっかけさえあれば、真剣に考えている姿がみてとれた。より多くの学生に地域医療について考えてもらうためには、教育の一環として授業に組み込むことが必要だと考えられる。

e. 地域医療サークル「ぶちぶら」新入生説明会 地域医療レクチャー

平成24年4月13日（金）福井大学 医学部 地域医療サークル「ぶちぶら」の新入生説明会に講師として招待され、地域医療レクチャーを行った。4月に入学した1年生およそ30名に対して、地域医療のレクチャーを行い、その後「地域医療のよいところを探そう」というテーマでKJ法によるグループワークを行い、地域医療について考えてもらった。さらに、「地域医療の課題を探そう」というテーマで再度グループワークを行い、地域医療について深く考えていける形式にて課題抽出を行った。そして最終的に、「そうした課題を解決するために大学6年間で何ができるか？」というテーマで、自分たちが地域医療に対して何ができるのかを考えてもらった。漠然と遠い未来の地域医療という話が、身近に感じられ、明日からでも自分たちで遣って行けることがあり、行動することが、地域医療を変える可能性があるということを実感することができていたようであった。

f. 地域医療サークル「ぶちぶら」新入生歓迎会 レクチャー&現場体験

平成24年4月30日（月）福井大学 医学部 地域医療サークル「ぶちぶら」の新入生歓迎会を合同で開催した。地域医療サークルのメンバー15人が参加しレクチャー&現場体験を行った。まず、レクチャーにて「地域医療の実際」について講義を行った。その後、地域密着型特別擁護老人ホーム、小規模多機能+サービス付き高齢者専用住宅、診察同行の3チームに分かれて、現場体験を行った。これまでに在宅医療の診察同行などを経験しているメンバーが多いため、地域にあるサービスを見学することで、地域医療の多職種連携について考えてもらった。これまで地域には様々なサービスがあり、多職種連携が地域医療を行う上で重要であることは理解していたメンバーであったが、実際に見学するのは初めてであったため、地域のサービスがどのような場所で、どのようなサービスを展開しているのかを体験することができた。施設というだけでマイナスなイメージを持つ学生も多かったが、実際に現場体験してみると、きれいな外観と行き届いたサービスに驚きを持つ者が多かった。また、施設という選択肢をしたからこそ、家族も本人も幸せに過ごせている事例などを知ることで、改めて地域のサービスについて考えるきっかけになったようであった。

その後、参加者全員で会場を移しBBQを行いながら、現場体験の感想や新たにわき上がった疑問、質問などに答えるようにした。食事を交えながら和気あいあいとした雰囲気の中交流する

ことで、より活発な意見の交換ができ、新たな課題なども発見できたようであった。

これまでの在宅医療診察同行だけでは伝えられなかった、地域のサービスについても、現場体験をすることで、学生自ら考えるきっかけとなったようである。在宅医療は医療だけでは成り立たない。地域のサービスと連携することが重要である。その地域のサービスを知ること、地域医療の教育には重要であることが、今回の体験から知ることができた。

## 2, ICT の利用

ブログやホームページ、メーリングリストなどを活用し、在宅医療の普及やレクチャーを想定していたが、ブログやホームページではつながりが乏しく、興味のあるもの同士の広がりにかけると思われた。また、メーリングリストも同様に、登録しているものにしか情報がいかず、伝達できる内容にも限界があると考えられた。

そこで、SNS の Facebook に注目してみた。Facebook では、ページを簡単に作成することができる点、画像だけでなく、動画もアップできること、そして、興味のある人たちのつながりが広く拡散していくことが期待できた。さらに、こちらからも興味を持っているであろう団体などに呼びかけすることができるといった利点が考えられたため、Facebook を利用してレクチャーや情報共有を行うこととした。

## 3, 長期休暇中に在宅医療現場実習

8月23日(木)・24日(金)に地域医療で実績を残している福井県名田庄地区で『名田庄「地域医療塾』と銘打って、地域医療合宿を行った。1泊2日の合宿で効率的に地域医療の真髓が理解できるように工夫した。

これまで実習をしてきた学生のアンケートなどからキーワードを抽出し、そのキーワードをクリアできるような研修内容をプログラムすることとした。(キーワードの抽出は、<巻末資料1>に詳細を記載する。)また、なるべく参加者主体の合宿となるように、福井大学 医学部 地域医療サークル「ふちぶら」に協力を依頼し、合宿の内容について、6回にわたり打ち合わせを行った。以下にプログラム内容を記す。

### a. 在宅医療レクチャー

在宅医療の基本的な考え方や在宅医療の目指すものといった在宅医療入門のレクチャーを行い、在宅医療の理解度を高める。

→ 中村先生からの在宅医療レクチャーにて、在宅医療の実際や真髓について講演を依頼した。

### b. 地域での在宅生活体験

キーワードの『おうち』や『コミュニケーション』の学習を目的にし、実際に地域に出て、住民がどのような住宅で、どのような生活を過ごしているのかを体験する。また、在宅生活で、どのような場面に困難を感じているのかを調査し、在宅生活を継続するための考察を深める。

→ 「寄りそ医」実習と称し、診察に来た患者さんの通院に同行しながら、コミュニケーション

ンを行うプログラムを企画した。また、地域を知るということで、名田庄村の歴史や文化などを調査できるようなプログラムも企画した。

c. 在宅サービス事業所見学、体験

キーワードの『連携』を学習するために、デイサービスや訪問看護ステーション、訪問介護事業所といった地域の事業所を見学することで、どのような事業所がどのようなサービスを提供し、利用者がどのように過ごしているのかを体験する。

→ 名田庄村で実際にサービスを行っている事業所に訪問し、一緒にサービス提供できる機会を設けた。

d. ロールプレイング

キーワードの『コミュニケーション』を学習するために、医療面接や診察のロールプレイングを行う。在宅医療での医療面接を体験することで、どのような場面で、どのような情報を引き出し、どのように伝えるのかを学習していく。

→ 「待ちあ医」実習と称し、待合室で患者さんとコミュニケーションを行い、病気のことだけでなく、生活のこと、地域のことを聞けるような企画を行った。

e. ワークショップ

キーワードの『BPSアプローチ』を学習するために、ワークショップを行う。今回の合宿で体験した在宅での生活や在宅サービス事業所での体験を踏まえて、BPSアプローチを行う。実際生活している人の事例をBPSアプローチに落としこみ、問題点の理解と解決策の考察を行う。

→ 地域で調査してきた名田庄の生活や文化についてワークショップにて発表を行った。発表した内容について、中村先生から講評を頂くことで、多角的な視点から捉えられるように工夫をした。

#### 4. アンケートによる調査

診察同行、「在宅医療の魅力とは?」、『名田庄「地域医療塾」』の開催後参加者にはアンケート調査を行った。

アンケートでは、プレアンケートとポストアンケートを実施し、実習や講演を通じて参加者の意識がどのように変化していったのかを調査できるようにした。

アンケート結果については、下記に記す。

#### 5. ハッピーコーディネートプロジェクト

11月からの診察同行+在宅医療勉強会に参加していた医学生達によって、「学生だからできることがあるのではないかと」の思いが聞かれ、ボランティア団体を結成することになった。また、あおぞら診療所上本郷 院長 川越 正平先生の「在宅医療の魅力とは?」の講演会に参加していた医学部以外の看護学部や栄養学部の学生も、ボランティア団体の存在を知ることによって、共に活動をしていくことを決めた。

当クリニックも日常の診療の中で、より多くの情報収集や関わりを持つことが、患者の幸せにつな

がると実感しながらも、十分な時間を確保できずにいた。また、患者もサービス以外の関わりを求めていることを実感していた。

今回結成された学生ボランティア団体の活動を、当クリニックで支援し、活動の前後でどのような心境の変化がみられるのか、どのような知識・技術を習得したのかを調査することは、今回のプロジェクトの目的と一致すると判断した。また、専門領域の違う学生達がコラボレーションすることで、より活発な活動になると共に、学生のうちから多職種共同についても学習できるよい機会だと考えた。

継続的に在宅医療に関わることや、患者宅で過ごすことが、在宅医療教育においてどのような効果をもたらすのか、この活動から得られた結果を精査することで、今後の在宅医療教育に一石を投じるものになると考えられる。

## ○ 結果

### 1, 各アンケート結果

#### a. 「在宅医療の魅力とは」アンケート結果

<プレアンケート>・・・巻末資料2

参加者は13名であった。医学部生や研修医だけでなく、看護学生や看護師さらには栄養学の学生までも参加していた。

「何を期待してこの研修に参加したか？」の問いに対しては、最前線で活躍する川越先生の在宅医療について期待しているところが多かった。また、福井県以外の在宅医療の実状や、10年以上在宅医療に携わってきた経験談を望んでいることも分かった。他地域の実状や長年に渡って在宅医療を経験している先生からの話を聞く機会は減多にないため、この機会に色々と学ぼうとしていることが分かった。

「将来どのようなフィールドで働くことを考えているか？」については、在宅医療、地域医療を志している参加者が多かった。将来の進むべき姿を今回の講演を通して見極めようとしてることが伺えた。

<ポストアンケート>・・・巻末資料3

「講演の中で印象に残ったことは何ですか？」の問いに、実際の事例の話を印象に挙げているものが多かった。特に多職種連携の話を印象に挙げているものが多く、在宅医療における多職種連携の重要性や、多職種連携の実際を知ることができたことが大きかった様子。川越先生が手探りしながら在宅医療を勧めてきた事をうかがい知ることができ、参加者の共感を得ていた。

「今回の講演を将来どのように活かしますか？」の問いに対しては、今回の講演がすぐには役立つものだと実感していないものの、将来地域というフィールドにたった際には、必ず役立つものだと実感している参加者が多かった。また、今回の講演をきっかけにして新たな学習意欲や将来について考えるきっかけとなっているものもいた。

また、プレアンケートとポストアンケートで「将来は地域で働くことを考えている」という質問を設定し、講演前後でどのように変化したのかを調べた。プレアンケート時は、平均6.4ポイントであ

ったが、講演後は6.9ポイントとわずかに増加した。個別にみても、講演後にポイントが上昇しているものが4人おり、下降しているものはいなかった。講演を通して若干ではあるが、将来地域で働くことを考える割合が増えたことが示唆された。

## b. 『名田庄「地域医療塾」』アンケート結果

### <プレアンケート>・・・巻末資料4

まず「これまでに地域医療の実習をしたことがありますか？」の問いに対し、14名中8名が実習に参加したことがあるという結果であった。実習経験や頻度にはムラがあるものの、多くの参加者が、地域医療実習を経験していた。

次に「地域医療の必要性とその問題点について考えつくことを書きなさい」という問いに対しては、地域医療の必要性を認識、実感しているものの、実際にはうまく提供できていない現状を記入しているものが多かった。中には、今合宿のきっかけにもなった、地域医療の教育が少ないと挙げているものもいた。また、在宅医療のハード面の問題を挙げている者もいた。地域医療の必要性と実際とのギャップに問題点を感じており、その問題をどのように解決すればよいかのジレンマに悩んでいることが考えられた。

次に「在宅医療について思いつくことを何でもお書きください」の問いに対しては、患者・家族を中心とした医療というイメージがみて取れた。また、温かいや優しいといったイメージのコメントもみてとれた。在宅医療を病院の医療と対極にとらえている者もいた。

さらに「これまでに地域医療の教育を受けたことはありますか？それは、どこでどのような教育でしたか？」の問いに対しては、講演やレクチャーなどが多く、自分で選んで参加しているものであった。一方看護科では、大学のカリキュラムの中に「在宅看護論」や「地域看護論」という授業があり、教育の一環として地域医療が組み込まれていた。また、他県から参加した医学生は「地域医療学」というカリキュラムで地域医療について学んでおり、大学によってもカリキュラムの違いがあることが分かった。

### <ポストアンケート>・・・巻末資料5

「今回の合宿で良かった点・印象に残った点」について聞くと、名田庄村という地域を知ることができたこと、地域住民と実際に触れあうことができたことをあげているものが多かった。そのふれあいの中から、名田庄の地域力や住民力の高さを感じ取っていた。

次に「今回のような合宿が企画された際は、参加したですか？」の問いに対しては、全員が参加したいとの回答をし、中には友人を誘って参加したいというようにコメントしているものもいた。

次に、「今回の合宿で、地域での医療についてあなたの考えはどう変わりましたか？」の問いに対しては、地域を知ること、住民を知ることの大切さに気づいたものが多くいた。また、連携や家族といったキーワードを実感しており、合宿を通して、より深く地域医療について知ることができ、考えることができていた。

さらに「今後どのようなことを学んでいきたいですか？」の問いに対し、コミュニケーション力や

地域のこと、医療・福祉の連携といったテーマを挙げているものが多かった。スキルや知識ではなく、在宅医療においてはコミュニケーション力や家族、地域をみる力のほうが重要であると実感しているように思われた。

最後に、プレアンケートとポストアンケートで「地域についての理解度」と「地域と医療との関係性の理解度」について、合宿前後でどのように変化したのかを調査した。

「地域医療についての理解度」は、合宿前は平均 2.54（5段階評価）であったが、合宿後は平均 4.0 まで上昇している。参加者全員が合宿前よりもポイントが上昇しており、合宿を通じて地域医療の理解が深まったことが考えられる。次に「地域と医療との関係性」についてだが、合宿前は、平均 2.54（5段階評価）であったが、合宿後は平均 4.16 まで上昇していた。この質問も同じく全員が合宿前後でポイントが上昇しており、合宿を通じて地域と医療との関係性の理解が深まったと考えられる。

さらに、合宿前後で「地域で働くことを目指していますか？」の問いをしたところ、合宿前は平均 7.14 ポイント（10 ポイント中）だったのが、合宿後は平均 7.51 まで上昇した。変化の見られないものが 4 名いたが、10 名のポイントは上昇しており、合宿を通して、地域で働く意識が若干高まったように思われる。

## 2, ICT 利用の結果

今回の合宿のメイン対象者である学生は、すでに Facebook を日常的に操作している可能性が高く、学生同士の広がりも期待できた。実際に打ち合わせに参加していた学生の多くが、すでに Facebook を利用しており、ページ作成後もスムーズにアクセスしていた。

また、動画や画像も積極的に閲覧しており、そこから地域医療レクチャーも行えたものと考えている。ICT 利用の際、作成して終わりではなく、更新していくこと、そして活用してもらうことが重要であると考えられる。検索してようやくヒットするのではなく、日常的に見ることができる環境を創り出すことが必要であると思われる。

今回、Facebook を利用してみて、アクセスの良さや広がりを実感することができた。Facebook ページの開設後すぐに反応が見られ、友人を介して広がりをみせていった。また、8 月 30 日現在で 126 件の「いいね！」の反響があり、開設して時間がたつほどに反応は大きく広がっている。今後も Facebook を活用し、情報をアップさせていくことで、地域医療の教育を行っていきたいと考えている。

## 3, ハッピーコーディネートプロジェクト結果

今期間中に学生が患者宅で活動できたのは 4 ヶ所計 10 回であった。継続的に訪問し、交流を行うことは、双方の都合の関係上叶わなかったが、単発の交流では双方にとってメリットを得ることができたと考える。まず、患者にとっては、継続的に学生が来ることで、刺激ある時間を過ごすことができ、時間を立つのを忘れて会話を楽しんでいた。また、家族にとっても学生がコミュニケーションを取ることで、隙間の時間ができたり、新たな発見をすることができたりと、メリットを実感することができた。クリニックにとっても、学生が得てくる情報の多くは、知らない物が多く、新しい発見が



得られた。また、診察の際の会話にも学生が得てきた話題を使用することができ、診察の質の向上にもつながった。さらに、学生にとっても、どうしたら患者の想いを引き出せるか、どうしたら新たな話題を引き出せるかといった課題を持ちながら取り組んでいたため、コミュニケーションのスキルアップにつながったと思われる。

単発ではあるものの、直に患者と触れあうことで、地域の重要性や家族の重要性などを感じ取っていることが感想の中で見て取れるようになった。

## ○ 考察

学生に対して在宅医療教育をどのように行っていくことが効率的かつ効果的かを考察してみると、段階的に教育していくことが重要であると考えられた。

今回は、在宅医療に興味のない学生から、将来在宅医療のフィールドで働きたいと思っている学生に対して幅広く教育を行ってきた。また、その手法も、レクチャーから診察同行、合宿といった方法を用いて、在宅医療教育を試みた。

授業での在宅医療レクチャーや課題に対するレクチャーから、在宅医療に興味や関心のない学生でも、レクチャーや課題を通して在宅医療と触れてみたり考えてみたりすることが、興味や関心を高める可能性がある事が分かった。在宅医療は他の専門分野以上に関わることが少ないために、興味関心を持つ機会が少ないと考えられる。授業などを通じて在宅医療と触れあう機会を増やすことが、在宅医療の関心を高める一歩であると考えられた。

次に、在宅医療に興味、関心を持った学生に対しては、診察の同行などが有効であると思われる。レクチャーなどで在宅医療に興味を持った学生は、在宅医療についてよく分かっていないことが多い。しかし、教育を受ける機会が無く、現場を経験する機会も少ない。そのような状況において、実際の在宅医療の現場を経験することが、より関心を高める方法のひとつであると考えられる。実際に診察に同行し、自宅での診察風景、患者や家族の様子を経験することで、各々様々なことを感じ取っていた。しかし、診察後のアンケートを診ると、「コミュニケーション」や「連携」、「おうち」といったキーワードはしっかりと押さえており、診察同行がさらに在宅医療の興味関心を高める可能性が高いと考えられた。

そして、在宅医療に興味を持っている学生の関心をさらに高める方法として合宿といった方法が有効であると考えられる。今回の合宿の参加者をみても分かるように、合宿に参加している学生は、地域医療に興味関心を持っているだけでなく、すでに色々と在宅医療や地域医療の体験をしてきていることが分かった。在宅医療や地域医療を経験し、さらに深く知りたいと考えている学生に対して、地域や住民と触れあう機会を設けることが有効であると考えられた。アンケート結果からも分かるように、講演会などでレクチャーだけを受けるよりも、合宿などに参加し、現場体験や地域体験をした方がより在宅医療の関心を高めることが分かった。しかし、段階に応じた教育をしていかなければ、効率的かつ効果的な教育はできないと思われる。

## ○ 今後の課題

在宅医療の必要性が叫ばれている中、在宅医療を志す医師が少ないのは、学生の間にはしっかりと教育が

なされていない可能性は高い。今回の研究を通して、学生の段階に応じた在宅医療教育を行うことで、興味関心を高めることができるということが分かった。しかし、現状では在宅医療教育がカリキュラム内に入っていないところが多い。これでは、いつまでたっても裾野は広がらず、個人的に興味、関心を持っている学生だけが、自分たちでレクチャーや現場体験を得て、関心を高めていくしかない。

医学生の授業の一環として在宅医療を組み込むことで、裾野が広がり、興味関心を持つ学生も増えることと思われる。また、その学生達が次の現場体験へのステップへ踏み出せるような環境作りも必要である。医学部だけでなく、地域の診療所や病院なども教育に参加できるような協力が必要である。段階に応じた教育システムを構築し、選択肢のひとつとして在宅医療を選択できるような環境、教育体制を地域で構築していくことが望まれている。

## <巻末資料1>

これまでの研修医や学生のアンケートのコメントから、以下のようなキーワードが抽出された。

### キーワード『連携』

- ・ 退院した後の生活をどのようにしていくのかを初めて考えた。
- ・ 家庭医のチーム医療は、在宅生活においてより高い安心を与えることがわかった。
- ・ 各事業所の特性を活かすことが大切
- ・ 在宅チームには上下関係などはなく、患者を中心にサービスを展開している。
- ・ 各事業所で連絡をやりとりすることで、スムーズな連携ができていた。
- ・ 連携ができていて、家族や患者の安心感が増していた。

### キーワード『おうち』

- ・ 家族に対するケアが、患者をケアするのと同じくらい重要なのだとわかった。
- ・ おうちに帰ることも一つの治療だと思った。
- ・ 自宅の環境が患者に与える影響は大きい。
- ・ 病院で過ごす家族の時間と、自宅で過ごす家族との時間は、患者にとって、空間以上に大きな影響を与えていることがわかった。
- ・ 病院から在宅に帰るといふ、当たり前のことなのに、すごくハードルが高いことを知った。でも、そのハードルは医療者や患者が勝手に高くしているだけなのかもしれない。
- ・ おうちに帰った時の患者の笑顔が忘れられない。
- ・ 病院にいるよりも、身体的にも精神的にも健康で、安定することがある。

### キーワード『コミュニケーション』

- ・ コミュニケーションの技術で得られる情報が全然違うことがわかった。
- ・ 沈黙も重要なコミュニケーションになることに驚いた。
- ・ 病院での退院カンファレンスで、病院のスタッフがわかりにくい専門用語で話していた。家族にも理解できるようなわかりやすい言葉での説明が大切だと感じた。
- ・ 話を聞くということだけでも十分に治療であることがわかった。
- ・ 視線や表情など、ノンバーバルなコミュニケーションも重要である。
- ・ 部屋においてあるものや、部屋の温度なども生活を読み解く情報の一つである事に驚いた。

### キーワード『BPSアプローチ』

- ・ 同じ疾患でも他の側面が違うだけで、治療方針が違うことに驚いた。
- ・ 何の症状もなく病院に来ている人は、Bに問題が無くても、PやSに問題があることがわかった。病気以外の所に原因があることを考えて、話を聞くことが必要だと思った。
- ・ どこに問題があるのかを把握するのに有効な方法だと思った。

- ひとつとして同じ環境は存在しない。それぞれの環境に合わせてアプローチをしていくことが必要
- 実際の自宅での生活をみて衝撃を受けた。どういう所で生活しているのかなんて、病棟では想像もしなかった。

アンケートから抽出できた『連携』・『おうち』・『コミュニケーション』・『BPSアプローチ』の4つのキーワードに対する研修プログラムを組むことで、効率的に在宅医療を教育することができると考えた。また、『『病気の根治=患者の幸せ』の確固たる図式が崩された。』や「病院での医療は病気を治す事を目標にしているが、在宅医療は必ずしも病気を治すことだけが目標ではなく、患者や家族の希望、QOLを重視しながら病気とうまくつきあっていくことが目標」というような意見がみられたことから、在宅医療の基本的な考え方や在宅医療が目指すものといったレクチャーも必要であると考えられた。

<巻末資料2>

「在宅医療の魅力とは？」プレアンケート結果 まとめ

2、今日は何を期待してこの研修に参加されましたか？

- ・地域に密着した医療の実際を少しでも感じたくて
- ・ 在宅医療のスペシャリストが講演してくれると聞き、在宅医療に以前から興味がありもっと知りたいと思い参加した。
- ・ 他県での在宅医療の様子
- ・ 家庭医になる前に一般内科、救急などをしっかりと学んだ方がよいのか
- ・ 在宅ケアがどのようなものか知るため
- ・ 在宅医療に関心があり、参加しました。
- ・ 他では聞けないここでしか聞けない何か
- ・ いつもオレンジでおもしろい体験をさせてもらっているのですが、漠然としてですが、おもしろい話が聞けると思って参加しました。色々やってみたいことが増えました。
- ・ 何らかの形で応援したい分野。
- ・ 10年以上前から在宅医療をされている先生が経験や感じていらっしゃる事を教えていただきたいと思いました。
- ・ 福井県以外での在宅医療について知りたかった

3、あなたは将来どのようなフィールドで働くことを考えていますか？

- ・ 子どもの成長を支える仕事をしたい
- ・ 総合医、何でも診れる医師
- ・ 常にアクティブでいて、深く考えられる医師としての職業で働きたい。
- ・ 特に決めていない、できれば福井以外の医療をみてみたい。
- ・ 訪問看護などを考えています。
- ・ 内科
- ・ 地域医療や救急医療など総合的な診療をできる医師になりたい。特に最終的にはじっくりと患者さんと向き合える心の余裕のある医師になりたい。
- ・ 病理診断医
- ・ 具体的にはまだ未定ですが、家庭医や総合診療医として働きたいと思っています。
- ・ 専門医を必要としない999/1000をしっかりと診る事ができるようなフィールドで働きたい

### <巻末資料3>

「在宅医療の魅力とは？」ポストアンケート結果 まとめ

#### 1, 講演の中で一番印象に残ったことは何ですか？

- ・ 多職種連携について具体的ないい点を語られたところ。
- ・ 91歳の認知症の方が、家族面談をした日を境に様子がガラッと変わったというエピソード
- ・ 患者だけでなくその家族も一緒に看るということが印象に残りました。病院にいと、患者のことだけで家族のことは自分たちで解決してくださいということが多く、家族ケアをあまり行っていないと改めて思いました。患者・家族・医師が協力し、1番よい医療を提供し、何より患者さんの笑顔がすてきでした。
- ・ 在宅医療とはその人の背景も含めその人らしい生き方を相手と一緒に立場になってともに考えていくことであり、医療そのものに手段で過ぎない事が分かりました。ベット上で得られる情報は限られている。
- ・ 論文の結果と現場に素早く取り入れ「主治医」であり「先端医療」でもある点
- ・ 「連携しないとやっていけません」という状況に追い込んだ形態を意図的に続けているという話がとてもおもしろかった。
- ・ 多職種連携の具体的なエピソードの数々。特に歯科口腔の問題
- ・ 地域トライアングル構想の話
- ・ ご家族・ご遺族のボランティア会、家族会があることにびっくりし、感動した。
- ・ 自分が何かをしたいか以上に、世の中（地域）でどのような医療が必要とされているのかをつかむ。ニーズに応えることが大切であること。

#### 2, 今回の講演を、将来どのように活かしたいと考えていますか？

- ・ 自分自身は臨床心理士でもあり、今後は医師として心理職を含めた多くの職種の方とともに仕事をしたいと思うので、その時に生きてくると思う。
- ・ 今回の講演で、たくさんの分野の人々が1人の患者さん、その家族に関わることで、今まで見えてこなかったことが分かってくることもあると実感した。薬だけでは治せない病も、接し方を変えるだけで治ったりすることもあるので、将来は様々な人と協力してどう接しどう治療していけば患者さんにとって最善なのか考えられるように活かしたいと思う。
- ・ 患者だけでなく全体（周り）をみる看護ができるとういと思いました。
- ・ 今はまだ分かりませんが、将来必ず役立つものだと信じています。
- ・ 多くの職種の方々からどん欲に医療を学んでいこうと思いました。
- ・ まだ学生である期間が長いので、その間にも医学の勉強だけでなく、多職種の方々、その他の人たち、患者さん達などとの交流をして、自分の中の引き出しや外部ネットワークを広げたいと思うようになりました。
- ・ まだまだ将来について漠然としているので、様々なフィールドで働かれている先生のお話を聞いて、

今後の自分のあり方を考えるきっかけになればと思います。

- ・ もっと高学年になって自分の進路を決めるときに参考にしたい。

3, 今後どのような研修があると参加したいと思いますか？

- ・ 実際の患者さんのご家族やご遺族の方のお話もお聞きできればと思います。
- ・ 様々な分野の人が在宅医療に関わっていて、その人達の視点から在宅医療を通じて感じ取ったことを聞いてみたい。
- ・ あるカルテを例にどのようなことができるかを考える研修
- ・ 自分は看護師のため、看護の視点から患者がどのような関わりでどんなふうに変化したなど在宅の魅力が分かるような研修があれば参加したい。
- ・ ヒヤリ、ハットのようなその現場でしか学べないような話を聞ける会
- ・ 医師だけでなく、看護師やソーシャル・ワーカー、事務系の職種の方から見える地域の話を知りたいです。
- ・ ワクワクするような内容ならなんでも参加します。
- ・ 地域のニーズをどのようにとらえるかについての研修

## <巻末資料4>

### 名田庄「地域医療塾」プレアンケート まとめ

#### 2、地域医療の必要性とその問題点について考えつくことをお書きください

- ・家で生活したいという方のために地域医療が必要。でも、緊急時の対応や設備等に限界があると思う。
- ・ 離島、田舎、都会どこにでも地域医療は必要だと思っています。水道、電気、ガスなどのように「公」のものであると思っています。(民営、官営に関わらず)。
- ・ 問題点の一つとして、今までスーパーマン (Dr.Ns・・・) に頼ってきた医療を、循環型のシステムとして動かしていった方がいいのではと夢想しています。
- ・ 医療者と住民の人々のつながりが深くなるのが今の医療問題を解決するうえで必要。地域医療とは人々がつながることで可能となると思われ、必要だと思う。
- ・ 「地域医療」の定義があいまいなことが問題点
- ・ 地域ごとの特色や人となりを知って1人1人に合わせた地域医療ができていけばいいと思う。大きな病院に行けなかったり、そういう病院だとどうも患者さんの気持ちが分からなくなったりすると思う。
- ・ 地域医療の教育が少ないと思う。
- ・ 山間部やへき地で、医療を提供するのに必要。
- ・ 重要性があるが、医療者不足により、医療をうけられない地域もある。
- ・ 人が受けられる医療の幅を広げるために必要なもの
- ・ 知名度というか認識度が低く、もっと浸透させていきたい
- ・ その地域特有の医療を求めること
- ・ それを望む人がいるなら必要。
- ・ 地域医療の具体的な内容が思いつかないこと。偏ったイメージを持たれがち
- ・ 自分にとって患者さん達と家族を両方支えて、同じ時間を共有する。(決して押し付けない)
- ・ 医療者にも生活があり、限界がある。どう両立させるかが課題
- ・ 老人や子供は夜間に具合の悪くなることが多いので、地域にかかりつけ医がいない場合、どうしても救急車に頼ってしまう。

#### 3、在宅医療について思いつくことを何でもお書きください

- ・ 望む場所で、望む死に方ができるようなシステム作り
- ・ 患者・家族が中心 (病院よりも)
- ・ 関わりが深くなる。
- ・ 病院よりも温かいイメージがある
- ・ 沖縄県伊是名島で「看取り」をされた Dr の話
- ・ 住民との信頼
- ・ 自分は医師希望ですが、在宅医療は大学病院での医療以上に医師だけでは成り立たず、他の医療者との連



携が求められる（介護関係も）

- ・ 高齢者が高齢者の介護をしている家や、一人暮らしの高齢者の家について医療を行うというイメージ。これから在宅医療が必要とされ、増えていくと思う。その時になって自分はちゃんとできるのかなと思う。
- ・ 寝たきり患者さんや、外出できない患者さんにあった医療。
- ・ その患者さんと生活、家庭すべてを考慮した医療
- ・ 望んでいる人がいる限り、それに尽力する医療スタッフはいるべき。
- ・ 中村先生が頑張っていらっしゃるイメージがあります。
- ・ その家の雰囲気を崩さないで患者さんが安心して治療が受けられること。
- ・ 家を改良する必要がある。
- ・ 介護側のプレッシャーが大きい
- ・ 家の空気を感じて過ごせる
- ・ 孫とかにも気軽に会える
- ・ 同じ土俵に立ってみること。
- ・ 相手の気持ちに寄り添ってみること。深く自然に求めること、そこから本質の問題点が見つかり、ケアにつながる。
- ・ 在宅医療をする立場になっても、受ける立場になっても、病気そのものより精神的なことが心配になると思う。

4、これまでに地域医療の教育を受けたことはありますか？それは、どこでどのような教育でしたか？

- ・ 講演等
- ・ 学校で学んだ在宅看護論、地域看護論（看護科）
- ・ 大学のカリキュラム「地域医療」で
- ・ 和田診療所の井階先生の講演を大学で聞きました。
- ・ オレンジホームケアクリニックでの介護施設訪問
- ・ 紅谷医師のレクチャー
- ・ 特にありません

<巻末資料5>

名田庄「地域医療塾」ポストアンケート まとめ

1、 今回の合宿で良かった点・印象に残った点

- ・ 地域の方とのふれあい、交流
- ・ 地域医療の重要性
- ・ 最初に名田庄の地域について知ることから始めたこと。
- ・ 医学科や先生達と話す機会があったこと
- ・ 地域の方の住民力
- ・ 診療所などの医療者だけが突っ張るだけではなく、住民の方々が支えていると思いました。

- ・ 本当に近くで中村先生と交流ができた。
- ・ ご飯がおいしかった。
- ・ 部屋もきれいだった
- ・ 自分たちは「山間」にいると実感した。
- ・ 住民の優しい笑顔
- ・ ただ単に見学したりお話を聞いたりするだけではなく、自分から動けたり名田庄の人達と関わったりできて、地域のことを近くから見るのができたのがよかったです。
- ・ 名田庄という地域や人間性、人々のつながりを知ることができた。住民は皆、私たちのことを気遣ってくださり、心温かい人が多いことも認識できた点。
- ・ 中村先生の医療と住民の関わりを知ることができた点。
- ・ 地域の住民や患者さんとコミュニケーションを取れた点。
- ・ 地域住民の方々と触れあう機会が多かった。
- ・ 生の声を聞いてよかった。
- ・ 中村先生、紅谷先生のレクチャーからは多くのことを学ばせて頂きました。
- ・ 名田庄の地域力
- ・ 地域の人達のつながりがみれたこと
- ・ 医師と住民が信頼し合っている点
- ・ 人が大好きなのかなと感じた。
- ・ 実際に患者さんと関わる機会がもてて、その気持ちに触れることができた。印象に残ったのは、当たり前と気遣いという患者さんの言葉でそこには感謝の気持ちがある。
- ・ 若い子たちとのふれあいに感動しました。
- ・ まず、「楽しい」ということが、他の勉強系の合宿と違う所だと思います。
- ・ 距離も近く、何でも聞ける雰囲気がある。

2、 また今回のような合宿が企画された際は、参加したいですか？

- ・ したい
- ・ とても参加したい
- ・ 友人を誘って参加したい

3、 今回の合宿で、地域での医療についてあなたの考えはどう変わりましたか？

- ・ まずは、患者さんとしっかり話すことから始め、相手の考え方を理解し、診療・治療したいと思いました。
- ・ 前から「地域は温かい」というイメージがあったが、それがさらに強く大きくなりました。
- ・ 互いに住民が支え合い、医療と地域がまるで一つの家族のようで、こんな地域が、市町村が、都道府県が増えていったらいいなと思ったし、医療者である私たちが住民の方達が家族のように思ってくれる医療者になりたいと感じました。

- ・ より楽しく考えることができました
- ・ 色んな先生、色んな立場の方々がそれぞれの考えを持って地域での医療を行っていることを知り、正直地域医療がどういうものか分からなくなりました。考えていたより複雑だなと思ったからです。
- ・ 情熱とか人々のつながりとかもちろんだけど、システムとしてのまとまりも必要なことが感じられました。地域医療に携わる医師になりたいと思いつつ不安があったのですが、やっていけそうかなと思えました。
- ・ 大学病院とは違い、患者さんの生活をみなくてはならないため、名田庄のように住民と医療従事者が互いに支えあうものであるとわかった。地域医療は地域の住民生が多く関わる医療だと認識できてよかった。
- ・ 「地域の絆や住民の理解が、地域医療を支えている」ということを名田庄でやっと理解できた気がします。
- ・ 人と人のつながりが何よりも大切なんだと改めて感じる事ができました。
- ・ 医師と患者間のすき間がほとんどない。信頼しあえる医療を行える場
- ・ 変わったというかは、漠然としたイメージが具体性を持ったものになりました。住民がお互いの家庭事情、過去の病歴までよく知っていて、診療所への送迎をしあっていることなど
- ・ 過度の医療を提供するのではなく、介護や医療への個人・健康への関わりのヒントをあげて、ともに考えて行く医療が大事だと思います。
- ・ 自分が元気なうちは、色々なボランティアを頑張って、自分がお世話を受けなくてはならなくなったときは、次の人達からボランティアを受けたいと思いました。
- ・ 一人の人として、その地域の人と関わる事の大切さ
- ・ 中村先生が「名田庄科」を標榜しているとおっしゃっていたように、「その地域に必要なこと」を見極めることの大切さ

#### 4、 今後どのようなことを学んでいきたいですか？

- ・ 都会の大学病院という大きな組織の中で、どこまで患者さんと親密になれるか分かりませんが、可能な限り名田庄化を目指したいと思います。
- ・ 住民とのコミュニケーション力
- ・ 「家族」に関する知識
- ・ 保険・医療・福祉の連携
- ・ 地域医療がどういったものなのかはもちろん、紅谷先生が話してくださった「家庭医」についてもっと知りたい。学びたい。
- ・ どんな人とコミュニケーションをとる場合でも「共感」をいかにするかを考えていきたいです。
- ・ もっと地域の人と触れあったり、あとは家庭医の勉強とかも学問として、というか体験ももちろん大事だけれど、基礎的なことも勉強したいです。色々なことを学んで体験して自分のやりたいことを絞っていきたいです。

- 他の地域医療と住民との関連性がよいところの地域を学びたい。(名田庄のように、地域医療をうまく行えている地域)
- 医学を学ぶのはもちろん、地域医療について積極的に学んでいきたい。福井の地域医療だけでなく、他の地域のことその地へ行って学んでみたい。
- 将来、専門機関に進むと地域医療は全く関係を持つことが無くなるので、学生の間いろんな事を体験したい。
- とにかくいろんな事、知識もゼロだから何でもいい。
- 地域医療の必要性について再度学びを広げていきたい。
- 一つの選択肢としての「ACT」「在宅医療」(押しつけない医療?)

## 福井大学医学部「ぷちぷら」新歓ワークショップ 報告

2012/4/17 オレンジホームケアクリニック

4/13に、福井大学医学部の地域医療サークル「ぷちぷら」の新歓イベントに講師として招かれワークショップを開催しました。

この4月に入学したばかりの1年生が 予想を遙かに超える30人以上も集まり、会場は若くて熱いエネルギーが充満していて、オレンジスタッフもとてもよい刺激を受けました。



まずは紅谷の講演からスタート。

「地域医療」って何？なぜ必要なのか？できることとできないこと、などなど写真も交えながら 地域医療の魅力や課題を伝えました。



次はグループに分かれてワークです。

最初のテーマは「地域医療のよいところを探そう！」です！

みんな入学したばかりでついてこれるか不安でしたが ワークが始まったとたん、先輩方を中心に熱い議論が交わされました。



「病気だけじゃなくて、その人の生活や家族まで見るから信頼関係ができる」

「信頼してもらえると医療的なアドバイスや予防活動の受け入れもよくなる」

「医師もいろんな科の疾病に触れることができ勉強になる」

さすが地域医療に興味を持つ「医師のタマゴ」のみなさん、鋭い意見が続出です！

次のテーマは「地域医療の課題を探そう！」です。

「なり手が少ない」

「指導者も少ない」

「医師としての専門性を高めにくい」

「病院のような最新機器や設備、衛生的環境は望めない」

「患者さんを支える家族の負担が心配」

「他職種の連携は難しい」

「地域医療そのものがまだまだ知られていない」

現場で活躍するオレンジスタッフも「うんうん、そうなんだよね」と頷いています。

予想を遙かに超える大きな視点の課題抽出に嬉しくなりました。

最後のテーマは「そうした課題を解決するために大学6年間で何ができるか？」。

前ワークで大きな課題が挙げられたため、さすがにこの質問は難しかったのか、各グループ腕組みしながらしばし黙考。

それでも先輩たちが一緒に話し合っ て どんどんユニークな提案が出てきて、さすが地域医療サークルだと一同感心しました！

各チームから発表された目標です。

「ボランティア活動などに参加して人脈を広げておく」

「専門医にバトンタッチするまでの医療を勉強する」

「友達を増やして地域医療の輪を広げる」



最後に、紅谷Dr. より新入生への期待を込めてメッセージです。

先端医療と地域医療は相補い合うものです。

ぜひ専門に進む同級生とも仲良くなって将来の連携につなげてほしい。

もし指導者がいなくても、自分で情報を探して知識・技術を習得するというスタイルを身につけてもらいたいと思っています。

地域医療をやっている医師の中には 実際に見に来てほしい、と思っている先生がいっぱいいます。

今日話したことを一度必ず自分の目で見ることに、これを忘れないでください！

福井の地域医療は始まったばかり。

若いみなさんと一緒に、オレンジも理想へ向けた歩みを加速させていきます！